

本誌は4回にわたってコロナワクチンの「光と影」について報じてきた。それと軌を一にするかのように海外でワクチンの影の部分に焦点を当てた報告や報道が相次いでいるのは、この件が「転換点」を迎えている

るからなのかもしれない。ファイザー社製のワクチンを接種する前と後で、肺塞栓症という病気になる頻度が統計的にみて有意に高くなっていた——ワクチンを「緊急承認」した当のアメリカ食品医薬品局（FDA）

「権威」が「見直し」に警鐘

「河野太郎」のウソ

M」年末年始だけで104本!

「夫も店も失って…」遺族の悲嘆

最愛の夫を亡くして……

A) による調査結果が国際学術誌「ワクチン」に掲載されたことには以前触れた。また、今年1月1日、米国の一流紙「ウォール・ストリート・ジャーナル」に掲載された記事についてもすでにご紹介した。そこで触れられていたのは査読前の論文を元にしたものながら、ワクチンを3回以上接種した人のほうが未接種の人よりコロナへの感染率が高くなる、という「不都合なデータ」であった。

そんな中、これまでの流れからの「転換」を象徴するような記事が1月11日、世界初のニュース雑誌として知られる米「TIME」誌に掲載された。

記事に登場する「オフィット氏」とは、ポール・オフィット氏のこと。ロタウイルスワクチンの共同開発者としても知られる、ウィルスの世界的権威である。そんな人物が「オミクロン株を2価ワクチンで追いかけること、すなわち追加接種を行うことを「負けゲーム」と表現したのだ。

本誌でも、高齢者における重症化予防効果については、ワクチンの「光」を示す部分として繰り返し紹介してきた。オフィット氏もそれを認めた上で、若い人の追加接種を進めることについては「やめるべし」とはつきり述べたのである。無論、信用に足る様々な研究結果を元に氏がそう判断したことは言うまでもない。

「オフィット氏はNEJMでの論説において「抗原原罪」の問題に触れつつ、全年齢で一律に追加接種を行うのはやめたほうがいい」と主張しています。

京都大学附属病院外来化学療法部長などを歴任した、京大名誉教授の福島雅典氏はそう説明する。

「論説では、抗原原罪を、動物の刷り込みで喻えている。

「免疫を低下させて…」

我が国では相変わらず、若い人々どころか、小児や乳幼児にまで接種を推奨している。ウィルスの世界的権威までもが追加接種に疑問を呈し始めてもなお「立ち止まる」ことを考えないのであれば、もはや思考停止と言えよう。

もちろん、全世代に一律にワクチンを打つことによって感染予防に繋がっているのだから別だが、そうはなっていないことは22、23頁のグラフで一目瞭然だ。我が国における人口100

ます。動物が生まれてすぐに見たものを母親だと思いうように、コロナの武漢株への抗体が一度できてしまうと、それ以降も主に武漢株に対する抗体を産生してしまうわけですね。主張の主旨は、若い人への追加接種は、抗体が1〜2カ月で消えてしまいうからやめろ、ということですが、「TIME」のような権威ある雑誌が取り上げた意味は大きいです」

人あたりのワクチン追加接種回数は断トツで世界1位。その一方、感染者数も昨年の11月から、10週連続で世界最多を記録している。

「コロナによる直近の死亡者数については、日本はアメリカに次いで2位。しかし、日本の人口がアメリカの約3分の1であることを考えると、死亡者数も実質的に世界一と言えます。ワ

『TIME』「世界的コロナワクチン追加接種

特集

「ただの「運び屋」で逃げる

「テレビは客観報道できるか「ファイザーC

「思いやりワクチン」は「利他の強要」という専門家の指摘

遺族の心情を逆撫でする河野氏



ろ、昨年12月28日から今年1月3日までにテレビのキ1局で放送されたファイザ1社のCMの数は104本。その中にはワイドショーやニュース番組も含まれている。それでワクチンに関する客観的な報道ができるのだろうか。

また、政府の側からもワ

クチン接種を推進するための情報が発信されるばかりで、リスクを公平に伝えていいるとは言い難い。挙句の果てに、元ワクチン接種推進担当大臣で、現在はデジタル大臣を務める河野太郎氏は昨年の大晦日、自らのブログに、

「誰かが責任をとる、とら

「寒いねん」

してではない。しかし、〈反ワクチングループが、私があたかも後遺症について責任をとるなどと発言したかのようなデマをしつこく流しています。悪質なも

のに関しては、法的手段を検討します〉と訴えたのだ。そこから、リスクや副反応被害に正面から向き合う気概は微塵も伝わってこない。

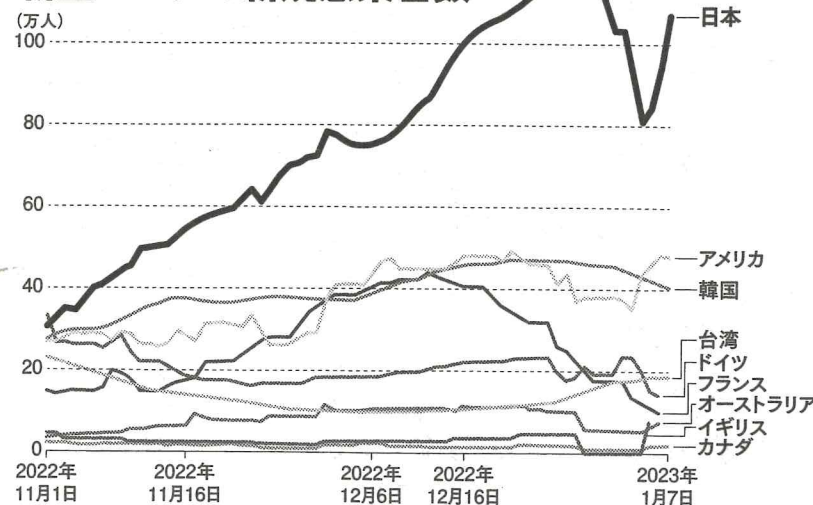
致すことはないだろう。最愛の夫をワクチン接種後に亡くした、大阪市在住の河野明樹子さん(58)。モデルナ製を21年6月29日の夕方に接種。1回目の接種だった。

「私たちは大阪でフレンチレストランをやっていたのですが、接種した日、店はお休みでした。翌30日は午後5時から8時まで二人で普通に働きました。その次の日、7月1日は予約が入っていなかったためお休みすることにして、私は午後2時頃に自分の実家に出かけました。主人が、たまには帰ったれや」と言うものですから……」

1日朝、夫は河野さんより早く起き、居間でコーヒを飲みながらテレビゲームをしていたという。

「あの日は主人が、焼肉が食べたい」と言っていたので、実家からの帰りがけにどれくらいの肉を買うか相談するため、主人に電話をかけた。ところが、そ

新型コロナの新規感染者数



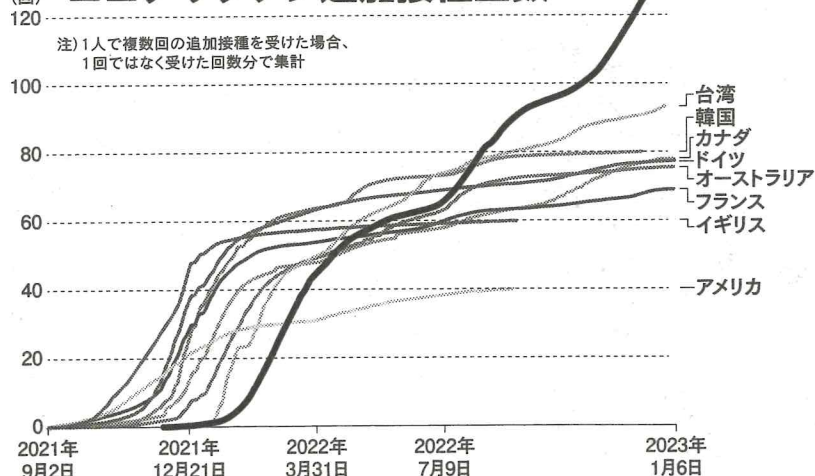
ないという問題ではありませんし、「運び屋」の私が「後遺症について」責任をとるなどという発言をしたことはありません」と、逃げ口上を綴る始末である。曰く、自身が「責任を持つ」と言ったのは「接種の進め方」についてであり、ワクチンの後遺症に関

そもそも、河野氏はこれまでもブログでワクチンに関するデマについて取り上げ、根拠なしと一刀両断にしてきたが、それらは本当にデマなのか。『ワクチンの境界―権力と倫理の力学』(アメーzing出版)の著者で神戸大学大学院経営学研究科教授の國部克彦氏が言う。

更新したブログでもデマについて取り上げ、〈これまでに(ワクチン接種後に亡くなった事例で)ワクチンとの因果関係が否定できないと判断された事例はありません〉と記している。

医療機関やワクチン製造販売業者から国に報告された、国内でのワクチン接種後の死亡例は22年11月13日までで1919件。その中に厚労省が因果関係を認めた例は確かにないが、河野氏のブログでは、ほとんどのケースが「(評価不能)」とされていることに触れられていない。それについて多くの遺族が憤っていることに、氏が思いを

人口100人あたりのコロナワクチン追加接種回数



「唯一思い当たるのは、亡くなる前日の夜に寝る時、太っていて暑がりの主人が『寒いねん』と言っていたこと。それで布団をかけてあげたのですが、一緒に寝ているとこっちは暑いくらいでした。亡くなった日の朝も寒いのと言ってたのですが、クーラーが効きすぎているのかと思っただけで……」

「監察医のもとを何度か訪れ、改めて調べてくれ」と言っても、河野大臣がワクチンで人が死ぬと言っているか? 言うてないやろ」とか、国相手に裁判したって負けるで、などと言われました。その後、かかりつけ医から国に報告をあげても「評価不能」でしたが、結果は「評価不能」でした。

死因は虚血性心疾患。通夜の席で夫の親友から「ワクチンのせいちゃうか」と言われ、ワクチンとの関係を疑い始めた。

国に報告された接種後死亡1919件には、1919通りの血の通った人生があったことは言うまでもない。政府はそこに、事務的に「評価不能」の判を押して回っているのだ。

また、死亡例が相次ぎ、専門家から「すでに大被害になっている」との声が上がろうと、接種推進の方針に疑問を差し挟もうともしない。これを異様と言わずして、何を異様と言うのだろうか。

「厚労省はワクチンに関して『リスクよりメリットのほうが大きい』と説明して

の電話に主人が出なかったのです。しばらくたつても折り返しもない。それで『変だな』と思いながら帰ると、シャツにトランクスの姿の主人が書斎でうつ伏せに倒れていたのです」

夫はワクチン接種後、副反応などの症状は訴えていなかったが、

「心臓の病がなかった。心臓の薬は50歳の頃から飲んでいましたし、血圧も高かった。血液がサラサラになる薬も飲んでいました。役所は基礎疾患がある人とはかく打て打

「主人は亡くなった時、顔がうっ血して紫色になっていた。普通の死に方じゃない。私でも思いますよ。しかもワクチン打った2日後に。それをしっかり調べもせずに『評価不能』っておかしいでしょう。私ら夫婦には子供がいてへんかった。店を子供やと思っ

「厚労省はワクチンに関して『リスクよりメリットのほうが大きい』と説明して

「厚労省はワクチンに関して『リスクよりメリットのほうが大きい』と説明して